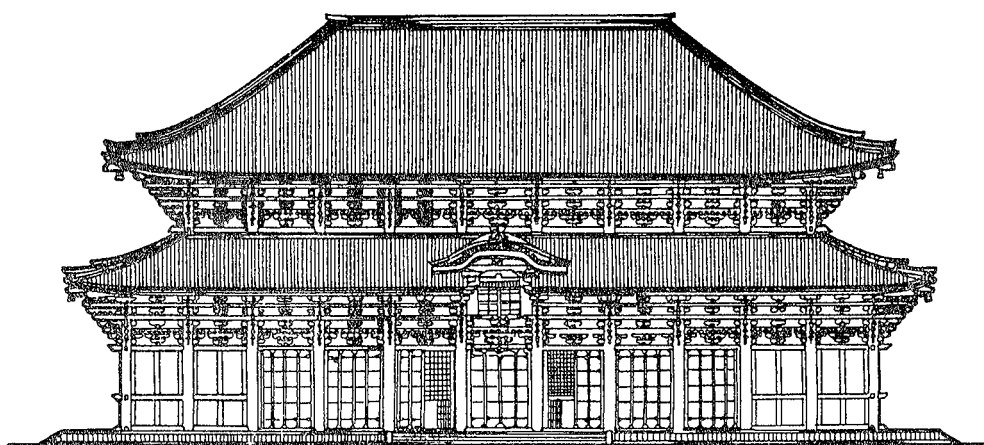


京都国立博物館構内発掘調査
現地説明会資料



再建期大仏殿正面
(『史跡方広寺石壘修復工事報告書』昭和62年 より)

1998年8月8日

京 都 国 立 博 物 館
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

京都国立博物館構内発掘調査現地説明会資料

所在地 京都市東山区茶屋町527 京都国立博物館構内

調査期間 1998年6月1日～継続中

調査面積 約450㎡

調査主体 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

1 調査の経過

今回の調査は、京都国立博物館新館建設に伴う発掘調査です。調査対象地は既存の新館周辺約1500㎡で、現在は新館の南側に東西約64m、南北約7mの調査区を設定し、調査を実施しています。調査開始後まもなく巨石列を検出し、これが「国指定史跡方広寺石塁」の延長にあたることを確認できました。遺構の遺存状態は大変良好で、今回ここに公開する運びとなりました。

なお調査は今後、新館の東側、北側と順次継続して実施する予定です。

2 調査地の歴史的背景

調査地点は平安時代後期には後白河法皇の後院であった法住寺殿、鎌倉時代には六波羅政庁に隣接し、桃山時代以降は方広寺境内に該当します。現在も博物館の南に法住寺殿の堂宇のひとつである蓮華王院（三十三間堂）、北に豊臣秀吉を祀る豊国神社、そして方広寺があります。

方広寺は天正14年（1586）、豊臣秀吉が奈良東大寺にならって大仏建立を志し、造営が開始されました。文禄4年（1595）、高さ六丈（約18m）の木製金漆塗座像大仏が安置され大仏殿もほぼ完成しましたが、翌年慶長元年（1596）の地震のため大仏は大破してしまいます。慶長3年（1598）大仏開眼供養をまたずに秀吉は死去し、その遺志を継いだ秀頼が大仏復興を命じ再建を開始、途中、火災に見舞われるなどして、慶長17年（1612）ようやく銅造大仏が完成しました。その後、大仏は銅造から木造に造り替えられましたが、寛政10年（1798）大仏殿に落雷、焼失するまで、「京の大仏さん」として親しまれていました。巨大な大仏殿や、茶店などが建ち並び大勢の人たちで賑わう門前のようすが、洛中洛外図などにも描かれています。

現在、往時の様子を残すのは大仏殿正面の門跡と寺域の西・北・南面の石垣、梵鐘だけ

となり、旧境内は現方広寺、豊国神社、京都国立博物館の3ヶ所に分割され今日に至っています。なお、現存する石垣は昭和44年に「史跡方広寺石塁および石塔」として国の史跡に指定されました。

焼失以前の方広寺の規模は南北百二十間、東西百間とあり、現存する石垣から南北約260m、東西約210mの規模であったと推定されます。門跡は西面中央やや北よりに位置し、この正面に大仏殿が建っていました。石垣は現在西辺全面と断続的に北面、そして南西コーナー一部から東へ続く南面が約25m残っていますが、東辺の石垣は現存せず当初から境内の周囲すべてに石垣がめぐっていたかは不明です。今回の調査地点はこの南面石垣の延長部分にあたります。

3 遺構

調査区の北側、方広寺南面石垣の延長部分にあたる位置で東西方向の石垣を検出し、出土遺物から方広寺創建時（桃山時代）のものと分かりました。石垣は調査区西端から東端まで約48mにわたり、それぞれ調査区外に延長します。石垣は1ないし2段目の石まで遺存していました。最下段には幅2~2.5m高さ0.5~1.5mもある巨石を据え、2段目は1段目に比べるとやや小振りな石を用い、それぞれの石と石の間の隙間を埋めるように小さな石をはめ込んでいます。なかには割り石痕が残るものもありますが、これほど大きく形も様々な石を一直線に並べ面をそろえて積み上げる技術は、相当なものであったと思われます。また刻印が刻まれた石もあり、当時、秀吉の命で地方からこうした石材や建築材を運搬した諸大名の印と考えられます。裏込めには径30~40cmの礫石を用い、間を粘土で埋めています。裏込め石として石仏・石塔・石碑も使われていました。

検出した石垣の東端近くでは、階段を想定させる石組みを検出しました。上下2段、幅約2.0mの巨石の間に小礫を並べ、さらに1段設けています。絵図ではこの付近に南門が描かれていることから、門に通じる階段があったのかもしれない。

また石垣の延長を確認するため、さらに東側に設けた調査区では石垣延長上に方広寺創建時より新しい時期（江戸時代後期以降）の石組み溝を検出しました。本来、方広寺石垣に使用していた石材を組み直して造ったと考えられます。

方広寺南辺の境界は後世まで地境として意識されていたようですが、明治時代以前に石垣の上段部は撤去され整地がなされていたものと思われます。

4 遺物

出土した遺物には瓦類、石仏・石塔などの石製品をはじめ土師器・陶磁器などの土器類、

銭貨などがあります。このうち瓦類が大半を占め、土器類は土師器・焼き締め陶器・国産施釉陶器などの小片が少量出土しています。

瓦には「大仏瓦」と呼ばれる大振りな瓦が見られ、なかには瓦当面に桐紋を飾った軒瓦などが出土しています。

石垣の周辺からは裏込め石として使用された石仏、石塔、石碑などが多く出土し、その数は現在までに60点近くにおよびます。また裏込め石の間から、錫杖頭部（銅製仏具）も出土しました。

このほか江戸時代～現代の整地層や瓦溜めからは焼けた瓦類が大量に出土しており、方広寺の火災に関係するものと考えられます。

5 まとめ

今回の発掘調査の結果、方広寺南面石垣を良好な状態で検出することができました。方広寺を描いた絵画資料では西面の石垣は描かれていても、南面の石垣が表現されたものは少なく、また調査区西側には石垣の南西隅が現存していますが、その延長が当時どのような状況であったかについては不明でした。今回の調査では約48m以上にわたる石垣を検出しました。現存部分を合わせると南面石垣は、少なくとも東西90m以上の規模であったことが確認できました。

今年、1998年は豊臣秀吉没後400年にあたり、各種行事が催されています。太政大臣、関白と昇りつめた秀吉は、京都の改造を行い、さらに聚楽第や方広寺大仏殿造営によりその権力を天下に示そうとしました。その秀吉が創建した方広寺の石垣の一部を、今回確認したことは大変興味深いことです。秀吉の死後、数奇な運命をたどった方広寺大仏殿ですが、この石垣を見ると当時の方広寺の大きさ、賑わいが目に浮かぶようです。

豊臣秀吉・方広寺関係年表

天正13年（1585）秀吉、関白となる。

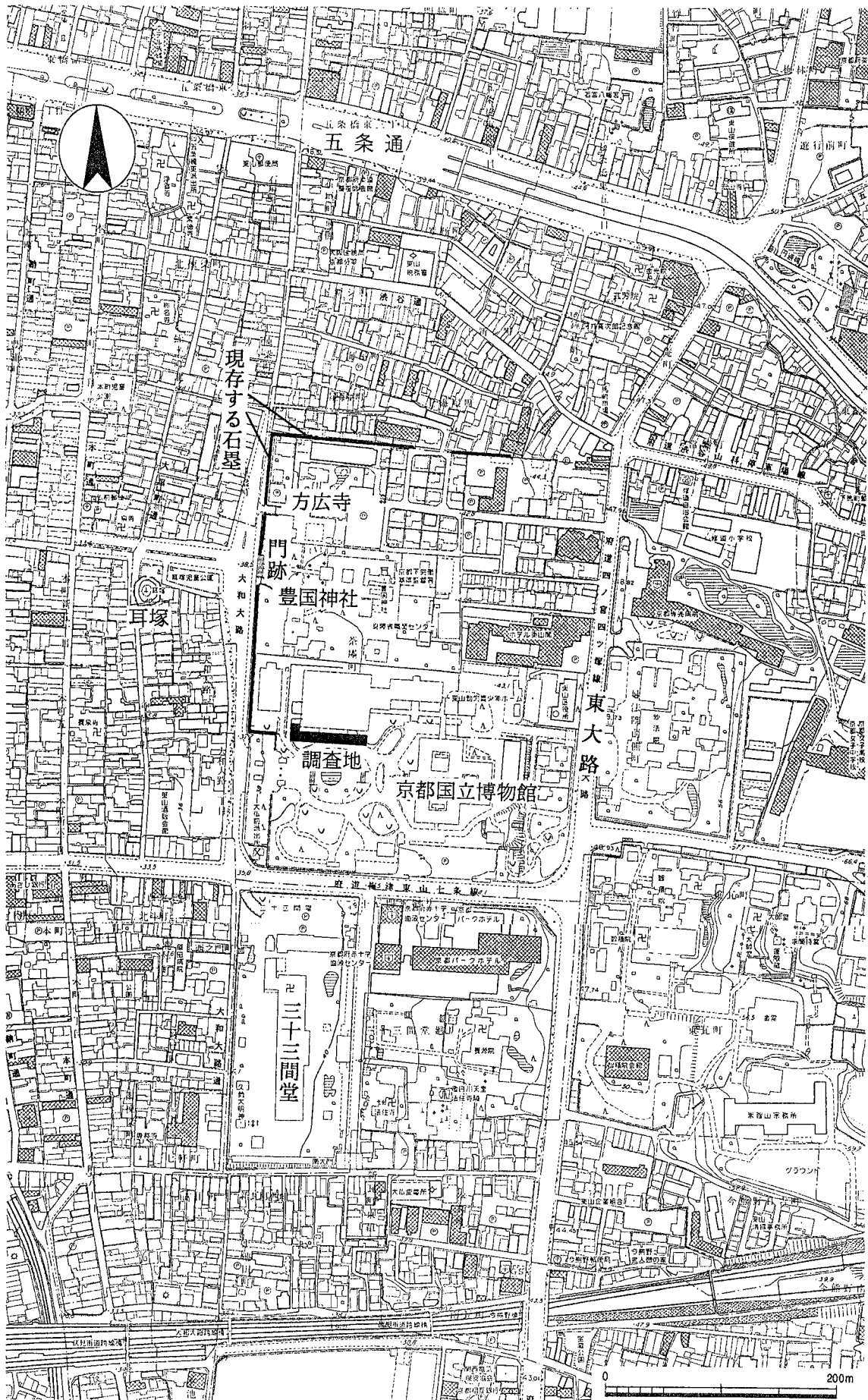
14年（1586）聚楽第造営開始。

大仏殿建立の地を「東福寺近傍」と定め、諸大名に用材の諸国運上を命じる。

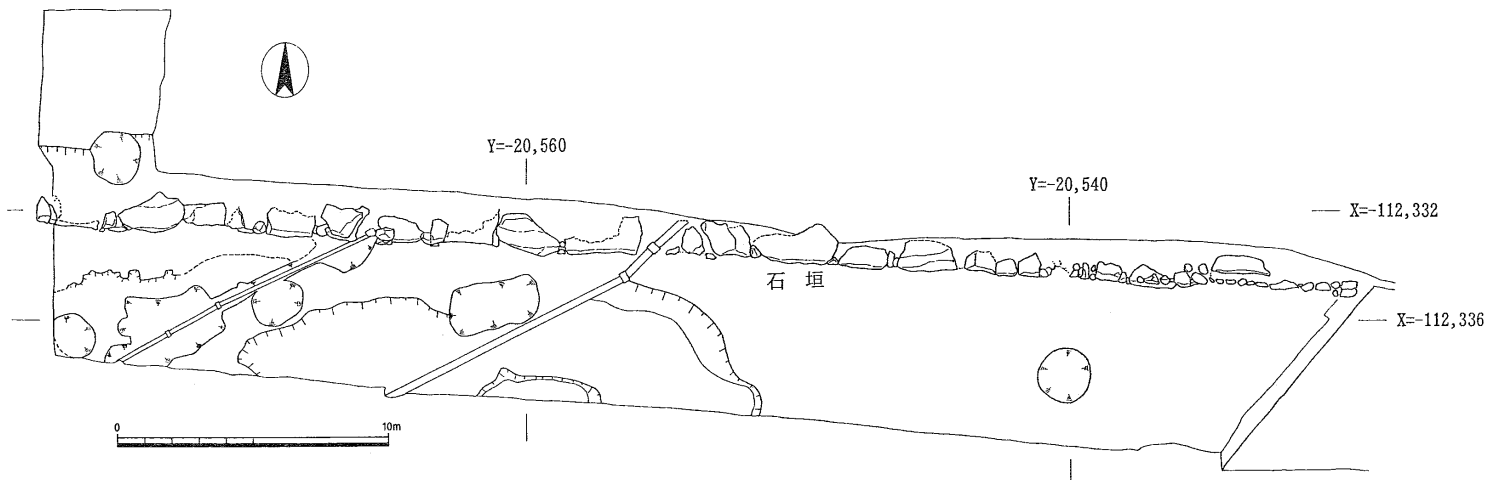
秀吉、太政大臣となり豊臣姓を与えられる。

15年（1587）聚楽第ほぼ完成し、秀吉、大坂より移る。

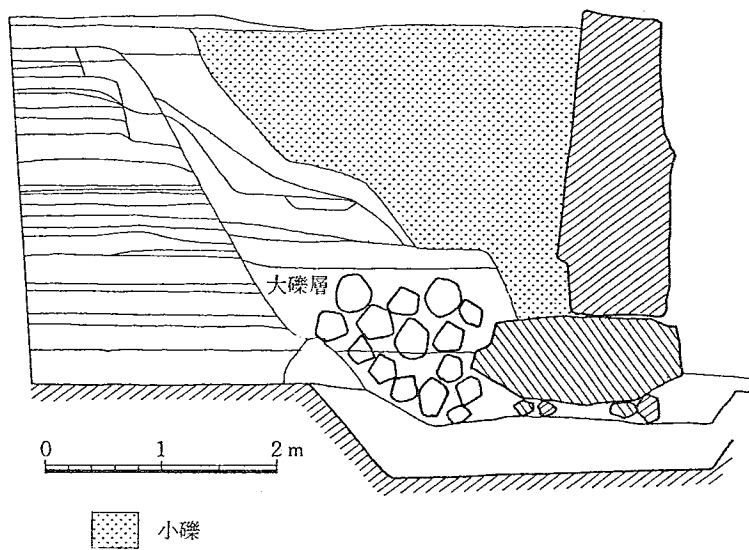
- 16年(1588) 大仏殿建立再開。建立地を蓮華王院(三十三間堂)北側に変更。
- 18年(1590) 小田原攻め。天下統一完了。
秀吉、京都の町割り改変に着手。
- 19年(1591) 大仏殿立柱・上棟式行われる。金銅仏から漆膠仏に変更。
御土居築造。同年中に完成。
秀吉、関白職を譲り、太閤となる。
- 文禄2年(1593) 方広寺大仏殿上棟を行う。
- 3年(1594) 伏見城完成、秀吉移る。
- 4年(1595) 大仏殿ほぼ完成。秀吉、父母の法会を大仏経堂で行う。
- 慶長元年(1596) 畿内に大地震。方広寺大仏と築地大破。伏見城も崩壊。
秀吉、大仏像にかえて善光寺如来を迎えることを命ず。
- 2年(1597) 伏見城再建、秀吉入城する。
- 3年(1598) 7月善光寺如来到着するも、秀吉の容態悪化にともない8月に送り返す。
8月18日、秀吉伏見城にて死去。
8月22日、如来不在のまま大仏殿で大仏開眼供養が催される。
- 4年(1599) 豊国社遷宮式行われる。
秀頼大仏復興を決定。大仏は金銅仏とする。
- 5年(1600) 方広寺大仏殿再建開始。
関ヶ原の戦い。
- 7年(1602) 鑄造中の大仏より出火、炎上。
- 13年(1608) 秀頼、再度大仏復興を企図。費用・用材の準備開始。
- 16年(1611) 6月、大仏殿地鎮祭。8月、立柱式。
- 17年(1612) 大仏に金箔が押され、台座・敷石など大半が完成。
- 19年(1614) 梵鐘完成。家康、梵鐘銘文に異議をとない大仏開眼供養の延期を命じる。
- 元和元年(1615) 大坂夏の陣。豊臣氏滅亡。
- 寛文2年(1662) 地震にて大仏小破。木像に造り替えられる。
- 7年(1667) 木造大仏及び堂舎完成。
- 寛政10年(1798) 大仏殿に落雷、出火。本堂、楼門、大仏焼失。



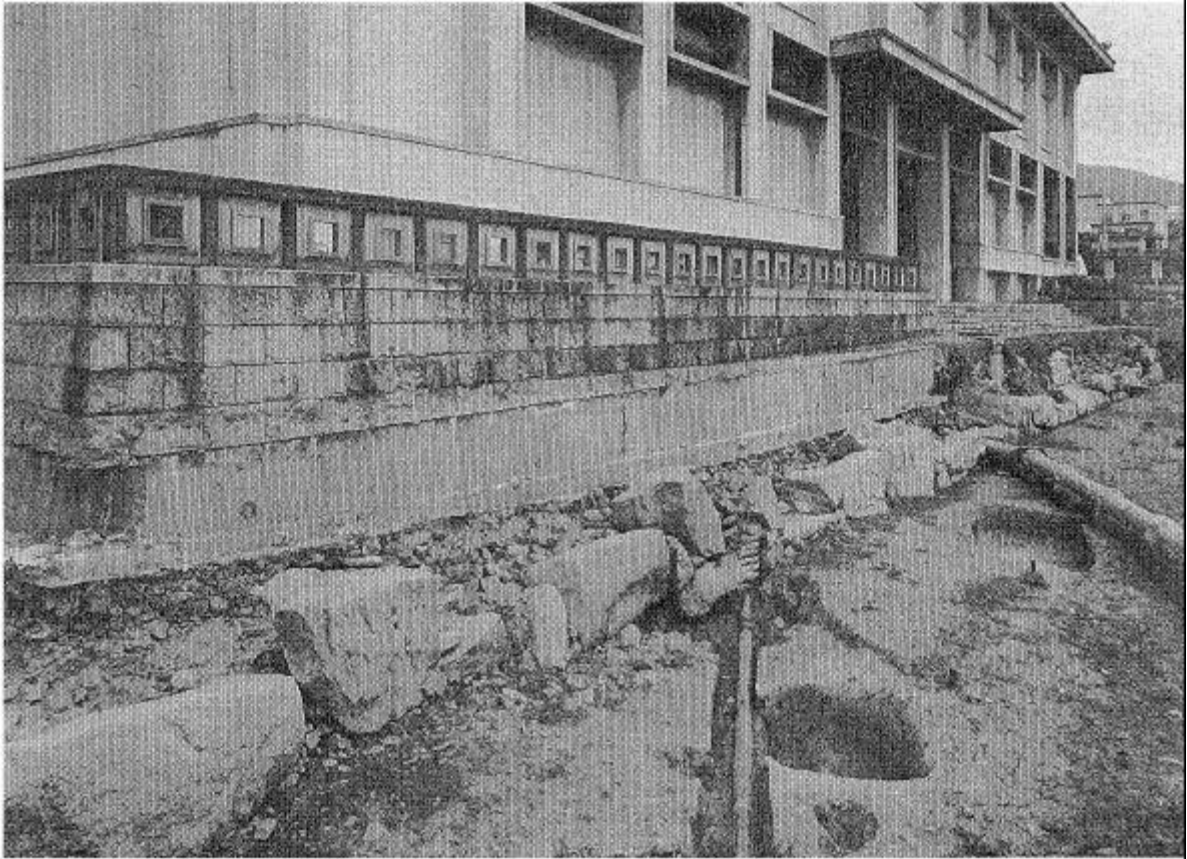
調査位置図



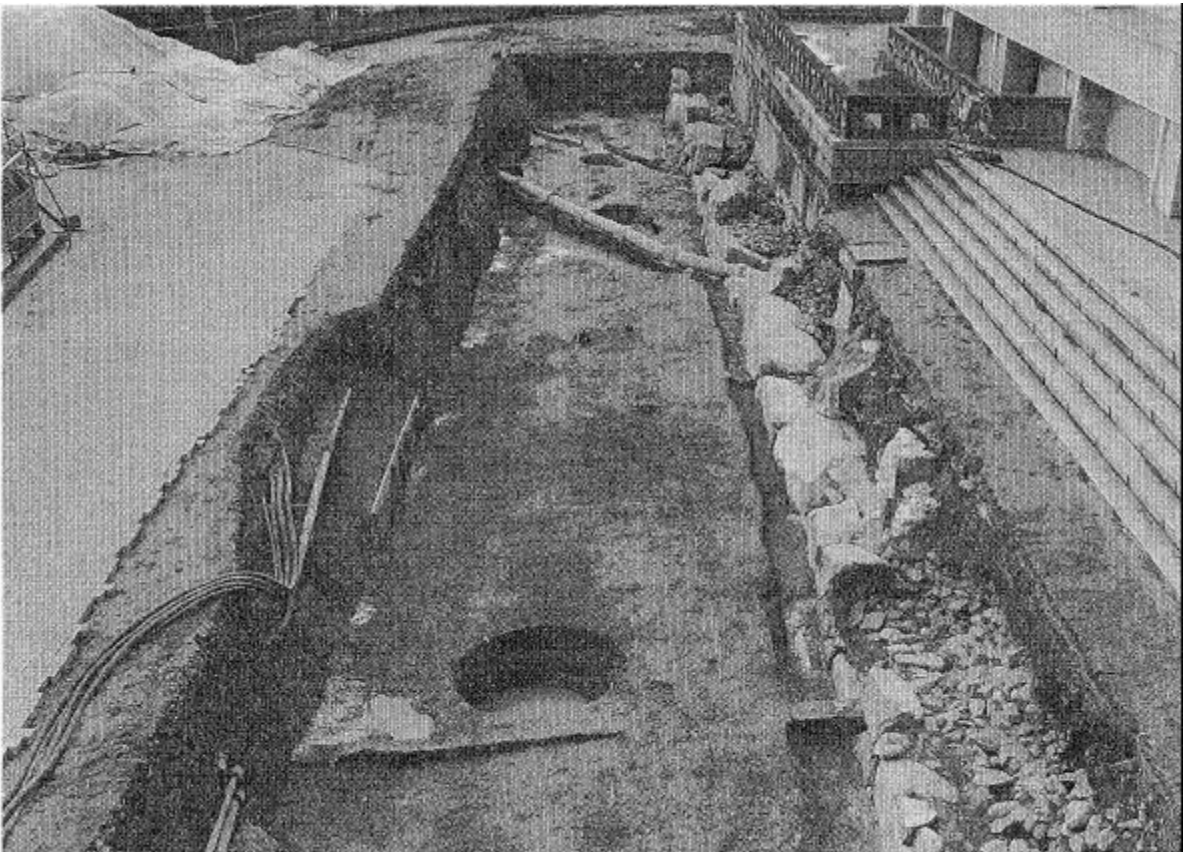
遺構配置図



石垣構築状況断面図（『史跡方広寺石垣修復工事報告』昭和62年 より）



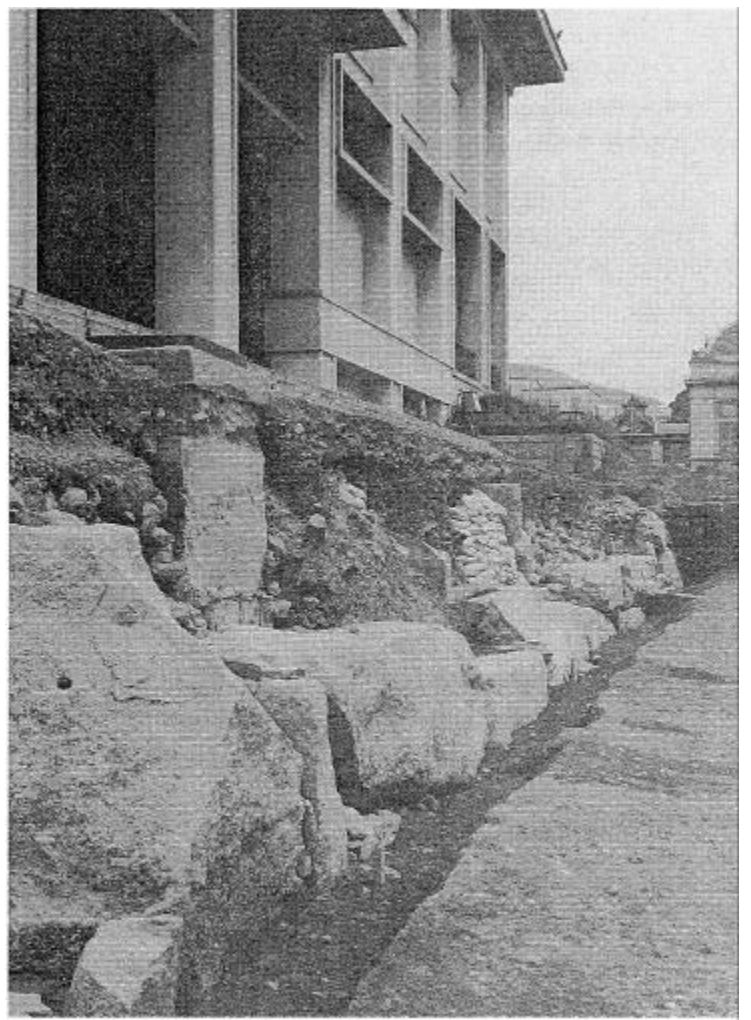
検出した石垣（南西より）



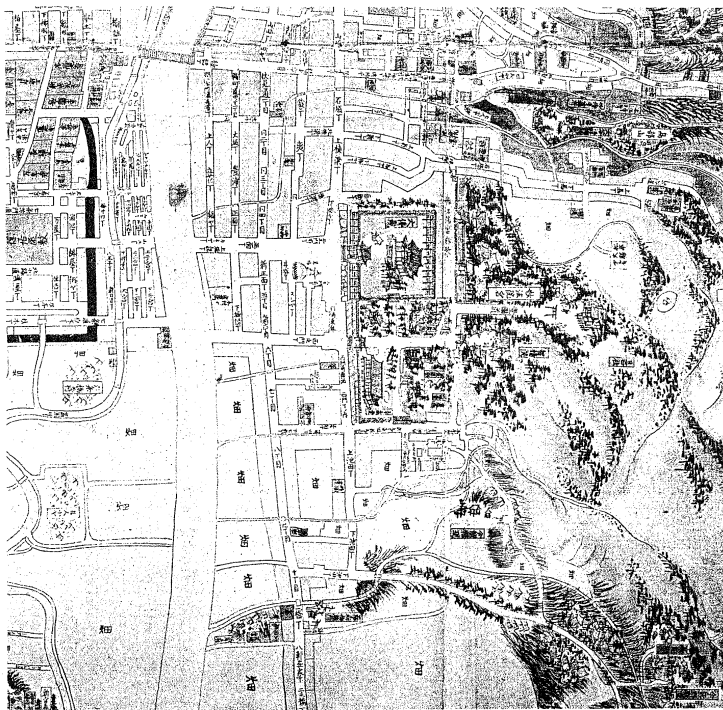
検出した石垣（東より）



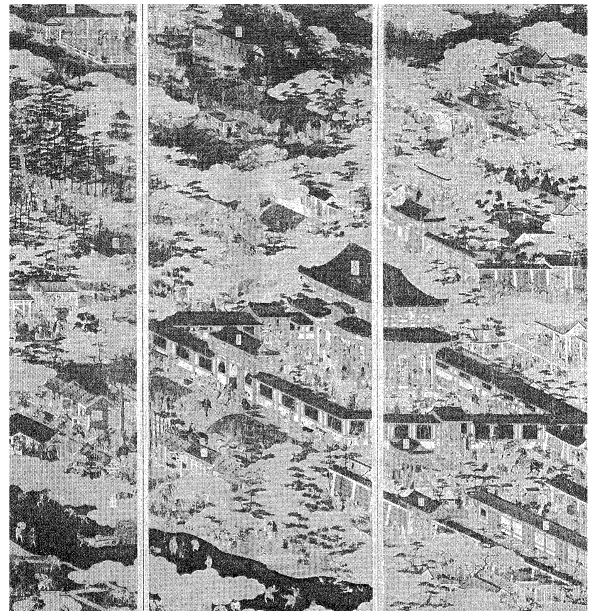
刻印のある石（南より）



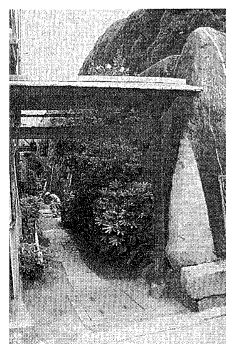
石垣（南西より）



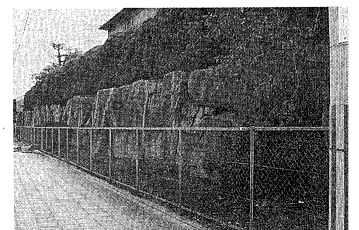
天明六年京都洛中洛外絵図（1786年）



洛中洛外図屏風（舟木家本）右隻 江戸時代



北西部石垣



西面石垣